

非漢字系初級クラスにおける「話す」活動の工夫

泉水 康子

科目名：漢字（非漢字系）

レベル：初級1・2／中級3・4・5／上級6・7・8

履修者数：12名

1. はじめに

2014年春学期より、早稲田大学日本語教育研究センターで、漢字コース（週1コマ、全15回）が開講された。筆者は、その非漢字系初級2レベルのクラスを担当したので、当該クラスで実施した「話す」活動の一端について本稿で報告したい。

当該クラスは、日本語初級レベルの学習者で、漢字に関する知識が少ない非漢字圏（アメリカ、韓国、タイ、スペイン、ブラジル、その他）からの留学生（以下S）12名により構成されていた。コース案内には、教科書に沿った漢字学習のほかに、日本語による口頭発表として「個人発表」が学期末（第14および第15回目の授業時）に予定されており、学習者が「興味を持った漢字を自分で調べて（日本語で）説明できるようになること」を、コース目標のひとつとしていた。そこで、筆者の担当するクラスでは、当該口頭発表の準備段階として、毎回の授業開始直前に、Sが自分で見つけてきた漢字の熟語を1語板書することを課し、出欠確認に代えた。そして、第11回目の授業では、Sに自分の名前を漢字表記して板書させ、そこに使用した漢字について簡単な発表をする活動を実施し、これを出欠確認に代えた。

2. 「自分の名前の漢字表記について話す」活動

初回の授業より、Sに入室時、任意の漢字の熟語を1語板書させ、授業開始時に、その読みと意味を講師（以下T）がSひとりひとりに確認することで、出欠確認に代えることとした。第10回の授業で、この活動がほぼ定着したので、第11回目の当該活動について、次のとおり概要を説明した。

- 1) 次回の授業では、入室時、自分の名前を漢字表記に直したものを板書する。
- 2) Sは、自分の名前に使った漢字を、漢字用語（音読み、訓読み、送り仮名等々）や、発表形式（発表の最後に、「以上です。なにか質問はありませんか？」と聞く等）を用いて、ひとりずつ前で発表する。
- 3) ひとり3分程度の短い発表だが、正確にストップウォッチで時間を計るので、事前に漢字を用意し、発表時間を調整するなど準備して来る。
- 4) 発表については、クラスメート全員で評価表を用いて互いに評価する。

さらに、今回の活動について、Sに具体的なイメージを持たせるため、次のような余談を交えた。

- 1) Tがかつて担当した日本語初級レベルのクラスで、アメリカ人の男子学生が、トムと

いう自分の名前に「吐夢」という漢字表記をあてはめていた。しかし、「吐」には vomit の意があるので、それに代わる漢字として「戸」や「都」などを勧めた。このように、漢字の含意を慎重に調べ、自分の名前にふさわしい漢字を選ぶよう示唆した。

2) 同様に、カナダ人の Lin という名の女子学生が、「鈴」という漢字にカタカナを添えて、自分専用のハンコを作り、日本土産として持ち帰った例を話した。

3) そこから、日本文化として押印の習慣やハンコについて簡単に説明し、Youtube 動画でハンコの手彫りの様子を視聴し、S の興味を喚起した。

当該発表日には 8 名が出席し、出欠簿の順で前述の手順どおり発表した。T はストップウォッチを使い、それぞれの発表者に 3 分の時間配分を明示した。3-4 分ほどの発表が終了後、ただちに、その発表者のパフォーマンスについて、評価表を用い、T ならびに S 全員で評価した。評価対象は、1) Explanation, 2) Pronunciation, 3) Grammar, 4) Fluency, 5) Attitude の 5 項目で、評価は Not good-----OK----Good----Very good-----Excellent の 5 段階とした。この評価は匿名とし、発表者に宛てた詳細なコメントを入れて、S 同士互いに改善を助けるよう奨励した。評価表は、T がスクリーニングすることなく、聴衆の生の声として、それぞれ発表直後、T の評価表を一番上に乗せてまとめ、発表者に渡した。

3. おわりに

このように、非漢字系初級漢字コースの授業で、出欠確認に代えた漢字の板書や、自分の名前の漢字表記の説明などを行い、「個人発表」のリハーサルとした。さらに、匿名のピア評価で、それぞれの「話す」パフォーマンスについて改善の機会を与えた。

こうして、日常的に見かける漢字表記やその含意に注意を払いつつ、段階的な漢字体験や日本語による発表体験を重ね、本番の「個人発表」では、どの学生も落ち着いて余裕をもって発表できていた。こういった段階を追った活動で小さな成功体験を積み重ねることで、また、S の自信やモチベーションを高める効果もあったのではないかと筆者は考える。Dörnyei は、わずかな成功体験を積みかさねることで学習者に自信を植え付け、学習へのモチベーションを高めていくストラテジーについて述べている (Dörnyei 2001)。今回の漢字発表における成功体験が、日本語学習全体に対する S の自信やモチベーションへとつながれば幸いである。

参考文献

Dörnyei, Z. (2001). *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.

(せんすい やすこ, 早稲田大学日本語教育研究センター)